

調査視察及び研修参加報告書

令和6年11月5日

会派名 江南クラブ
会派代表者 稲山 明敏

参加者：宮地友治、稲山明敏、尾関 昭、
東猴史紘、藤岡和俊、片山裕之、牧野行洋

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年月日	令和6年10月16日（水）
研修時間	10月16日（水）13:30～16:00
研修場所	人と防災未来センター（兵庫県神戸市）
研修内容	「実践的な防災対策とともに生きる」

調査視察及び研修参加報告書

■目的

阪神・淡路大震災の被災と復興、現在の状況を学び、情報の共有・拡散と市の防災に役立てる

■内容

1 阪神・淡路大震災の教訓

(1) 阪神・淡路大震災の概要

○地震の規模 M7.3、最大震度7、死者数6,434人、全半壊家屋249,180棟、避難者数(ピーク時)約32万人、直接被害額約10兆円(国総生産の約2%)

○震災の特徴

- ・戦後初の大都市直下型地震により都市機能が集積した人口集中地域が被災(被災地人口360万人)
- ・断層に沿った帯状の被害(東西約30km、南北約2~3km)
- ・高齢社会下で発生(当初仮設住宅入居者の30.5%が65歳以上)

(2) 震災の教訓を踏まえた防災体制の充実

教訓1 災害に対する備え、初動体制の大切さ

対策1 平時における備えの充実及び初動体制の整備。

(災害対策要員・専用庁舎・防災システムの確保)

教訓2 被災者の自立復興支援の大切さ

(復興支援基金と避難生活におけるコミュニティの大切さ)

対策2 新たな仕組みによる被災者支援として、被災者生活再建支援法、各種基金と共済制度、復興支援会議、NPOとの協働の開始・創設

教訓3 地域防災力の大切さ

対策3 地域防災力の向上として、自主防災組織の充実と学習会への専門家派遣、防災人災育成

教訓4 災害に強いまちづくりの大切さ

対策4 耐震化と都市の防災基盤整備、住民主体で地域特性を生かした街づくり

教訓5 震災の経験・教訓の語り継ぎの大切さ

対策5 震災の経験と教訓の発信として、人と防災未来センターの設置・運営、ひょうご安全の日の制定、国際防災協力を推進

(人と防災未来センター)

大規模災害が発生した場合、都道府県等からの要請に基づき、センターの専門家等を被災地の災害対策本部等に派遣

- ・被災地の現状と課題の調査、今後の災害対応について助言
- ・これまでに国内外68災害(国内55、海外13)に派遣

センターは阪神・淡路大震災の経験を語り継ぎ、教訓を未来に活かす事をミッションにし、西館のデザインコンセプトとして、水に困った大震災の教訓、一体となって助け合うことの重要性、情報発信を継続することを表現している。

センターには、6つの機能(展示、資料収集・保存、災害対策専門職員の育成、防災研究と若手人材育成、災害への現地支援、交流・ネットワーク)を持ち、数多くの資料と体験コーナーや映像室が2箇所設置され、語り部が震災当時の状況を話す。兵庫県の学生、全国の修学旅行、世界から観光客が多く訪れる。視察時には、他市の市議会議員団や欧米アジア諸国の方々が訪れていた。

■所感

1995年1月17日に起こった大震災。その対応・復興の記憶を後世に残す為に、この建物は建築される。

大震災の被害の規模を詳細に説明され、死者数、被害家屋数の数に圧倒された。

説明の後に、見た二つの映像（一つはゴジラを作成した方が担当し、音響と壊れる家屋の様子にとっても迫力あった）や展示物に加えて、実際の当事者である語り部の方々の実体験談から、多くの学びと気づきを得ることができた。

都市の中心地を含む広域大地震は久しく起こらず、まだ広域大規模災害という概念とそれに対応する体制がない時期に、阪神・淡路大震災が発生したため、様々な組織や人々の連携が取れず、自治体、公的組織、私的組織、地域、家庭がそれぞれバラバラに対応して乗り越えた（自助が活躍し、NPO元年とも呼ばれた）ということを認識した。

阪神・淡路大震災での対応は、様々な面で手探りという形になり、その困難（特に老年寄りや乳児や病人の）と強い意志力、悲しみを感じた。

語り部から「緊急避難所における集団生活は、本当に混乱、先が見えない状況で、特に排泄物の処理はきつかった」と聞いた時は、特にその困難と悲惨さが伺えた。

現在では、この時の貴重な教訓を元に、広域災害への対策・復興に生かされており、各種システム、建物、連絡網、組織に反映され、広域復興基金の創設、NPO法、自主防災組織の整備などが実施されている。

また、語り部の方の言われた『災害時の議員の役割は、地域の状況や生の声を整理して行政に届けること』という言葉がとても腑に落ちた。

訪れた三宮駅からセンターまでの間には、震災の傷跡もなく、きれいに消えていたが、この地で起こった災害を後世に語り継ぎ、その対策・復興への学びとする志には頭が下がる。

また、その志の一つとして、国内外の68箇所の災害地に現地調査・支援の専門家を派遣していることは、とても尊いと感じた。